

かについて本著では言及がなかった。パーニュの色柄には流行がある。パーニュの製造会社は、定期的にパーニュの新しいデザインを発表している。過去に販売されたデザインは保管され、時代を経て繰り返し活用され、それをもとにデザイナーにより新しいデザインが開発されている。消費者である女性の生地を選択が、流行をどのように動かし、それが製造会社のデザイン開発にどのようにフィードバックされているのかが明らかにできれば、大変興味深い。

評者は著者に、なぜパーニュで仕立てた衣服が女性たちの心をつかんだのか、という点について追求して欲しかった。著者は、洋服でない衣服文化がこの地域に根づいた背景を明らかにしているが、それがなぜパーニュだったのかということは依然として不明だからである。色鮮やかでデザインが多様、流行に沿っていることは、衣服として十分魅力的であることは想像できるが、ただ単にそれだけだったのだろうか？

パーニュで仕立てられた衣服は、まさに現代を生きる西アフリカの女性の「生」にフィットする衣服であったはずだ。衣服は肌にまとうものであり、まとうことで身体と身体の外にひろがる環境とのあいだに境界線をつくる。衣服は私とは誰か、どのような人間なのかということを表現する媒体である。女性たちにとって、身体観やアイデンティティ、ジェンダー、美的価値などを満たすような衣服だったはずである。著者が論じているような、政治的経済的な状況だけが、女性たちにパーニュを選び取らせているとは思えない。

著者が述べる「女性自身の堂々とした姿やしやれに対する意識の高さ」は、それだけでは説明がつかないからである。

以上論点を定めて、評論をすすめてきた。本著で書かれていないことについて「読みたかった」と述べるのはないものねだりであることは重々承知のうえである。今後著者が研究を重ねられたら、ぜひその成果を読みたい。評者のラブコールだと理解して頂けたら幸いである。

引用文献

- Eicher, J.B. and M.E. Roach-Higgins 1992. Definition and Classification of Dress: Implications for Analysis of Gender Roles. In Ruth Barnes and Joanne B. Eicher eds., *Dress and Gender: Making and Meaning in Cultural Context*. Oxford: BERG, pp. 8-28.
- 吉本 忍, 2006, 「アジアのプリント更紗」『更紗今昔物語』国立民族学博物館, 54-57.

東長 靖, 『イスラームとスーフィズム—神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会, 2013年, 314 p.

赤堀雅幸 *

日本のスーフィズム研究を牽引し、世界的にもこの分野の専門家として知られる著者の手になる本書は、二重の意味で地図としての役割を果たす。

その第1の意味は、過去四半世紀余りに生み出された著者の論攷の相互の位置づけを

* 上智大学外国語学部

示す地図として読み解くことができるということである。本書は1986年から2010年にかけての著者の論攷のいくつかを集成して、一巻の著作となした作品であり、著者の研究の展開を追う見取図を提供してくれる。評者が初めて著者と面識をもったのは、たがいが学部2年生だった1981年のことと記憶しているが、その後、エジプト留学の時期が1年ほど重なり、また1997年から共同研究を継続していることもあって、評者は著者の論攷の大半に目を通してきた。それでも、彼の研究の全体像を見直す機会を改めて与えてくれたという意味で、本書は有用だった。

第2の、より重要な意味として、スーフィズム研究の包括的な展開を示す地図としての役割も本書はもっている。これまでに、概説などの形で著者はスーフィズムの全体像を示してきたが、¹⁾より専門的な水準で、従来の研究が前提としていた枠組みをさまざまに批判しながら新たな全体像を提示しようとしている点で、本書は挑戦的な見取図を示している。著者のこれまでの研究活動のなかで、すでにいくつかの論点は、広く受け入れられているが、改めてそれらがまとまった形で示されていることの意義は大きい。

本書は以下のように構成されている。

序章

第1部：スーフィズムへの視座

第1章：スーフィズム研究の歴史と潮流／第2章：スーフィズムの分析枠組

／第3章：スーフィズムの歴史

第2部：神秘主義としてのスーフィズム—存在一性論学派を中心に

第4章：イブン・アラビーと存在一性論学派／第5章：存在一性論学派の顕現説における「アッラー」の階位／第6章：存在一性論学派における存在論と完全人間論—ジューリーを中心に／第7章：存在一性論学派の地域的展開と地域的偏差

第3部：民間信仰としてのスーフィズム—聖者信仰をめぐる

第8章：イスラーム聖者の二系列—スーフィー聖者と非スーフィー聖者／第9章：イスラームの聖者論と聖者信仰—イスラーム学の伝統のなかで

第4部：イスラームのなかのスーフィズム—その位置づけをめぐる

第10章：マムルーク朝初期のタサウウフの位置づけ—イブン・タイミーヤの「スーフィズム」批判を中心として／第11章：マムルーク朝末期におけるタサウウフをめぐる論争—ビカーイー・スユーティー論争を中心に／第12章：スンナ派とスーフィズム—ワッハーブ派への反批判をめぐる

終章：「多神教」的イスラーム—スーフィー・聖者・タリーカをめぐる

本書で、著者はあくまでイスラーム思想の研究者としての節を守っている。その分野に特化する限りでは、おそらく第2部と第4部、とりわけ第11章などは読み応えのある

1) 本書 pp. 283-284 に掲げられた著者の論攷以外にも複数がある（〔東長 1996, 2010a, 2010b〕など）。

章であるだろう。専門外の私にとっても、その整序された書きぶりは十分に理解可能であり、論理の運びようは、なるほどとうなずかされるものだった。

しかし、専門へのこだわりは著者の場合、過度に些末な事実に拘泥して、その事実を大きな構図のなかに位置づけるための展望を欠いたり、専門外の分野での研究動向から目を背けたりすることとは無縁である。理論的展望の点からいえば、第2章で2つの枠組みが提示される。そのうち、より重要なのは、「スーフィズムの三極構造論」である。スーフィズムを神秘主義、道徳、民間信仰の3つの軸からなるものとして捉えるこの提案は、神秘主義に偏った形でスーフィズム理解に反省を迫る点で効果的である。スーフィズムが常にこれらを要素として内包するという誤解を招く可能性はあるが、スーフィズムの歴史を概観する第3章に示される実例や、第2部と第3部の対照関係に目を配り、また、終章末尾の印象的な数頁（pp. 264-266）を読むならば、この議論がむしろスーフィズムの柔軟なありようを示すものであることがはっきりと理解されるだろう。

もうひとつ、評者自身が概念の提唱に関り、本書で「スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象」として取り上げられている概念も、理論的見通しとして重要である。この概念も、スーフィズムやタリーカ、それに聖者信仰が常に相伴しているとみる考え方だと誤解されることがときにあるが、「複合」であるからには、それらが元来は別個の事象であるとみなされている点に注意を払う必要が

ある。加えて、「複合現象」論はスーフィズムをひとつの要素とする複数の事象の構造的関係を問題とし、「三極構造」論はスーフィズム研究の総体を捉えようとする観点からの提案であり、この2つが単純に重なり合うような受け取り方をしないよう気をつけなくてはならない。

三極構造論との関係から、神秘主義としてのスーフィズムに注目する第2部では、著者の主要な研究対象であるイブン・アラビーと、彼に端を発するとされる存在一性論学派が取り上げられる。第4章でのイブン・アラビー自身の思想と存在一性論学派の思想との間に存在しうる落差や、「学派」という概念自体への反省的理解から始まり、第5章でのカーシャーニーとジーリーによるイブン・アラビーの思想の消化と体系化の異同、さらに第6章ではジーリーを例に取った存在一性論と完全人間論との弁証法的な関係、第7章では存在一性論の各地への展開と、展開先での知的伝統との相互影響が取り上げられる。評者にこの第2部の真価を判断する力があるかは心許ないが、一個人に始まる思想的営為の時空を超える展開を広く深く捉えていくための、多彩な着想に刺激を受けながら読むことができた。

この第2部と、民間信仰を聖者崇敬に代表させて論じている第3部との間に、道徳としてのスーフィズムを扱った数章が置かれるならば、さらに均整の取れた構成が実現できたところであらう。本書ではところどころに見通しは示されている（pp. 248, 250-252 など）ものの、道徳としてのスーフィズムは

まとまった形では議論されていない。これは分野としての研究蓄積の少なさによるものであろうかと推察されるが、今後、著者がこの分野についても研究を深め、その成果を公にすることに期待したい。

第3部は聖者を取り扱うが、民間信仰そのものを取り上げるわけではない。著者は思想研究者としての立場を崩すことなく、聖者に関するムスリム知識人の著作を取り上げることで、思想研究から民間信仰としてのスーフィズム研究への接点を探求している。第8章と第9章を通して、聖者崇敬の基盤たる聖者への信仰自体が民衆に限定された発想ではないことが明らかにされる。第8章では聖者論に2つの系統（第9章での言い方を先借りすれば、スンナ派神学のワリー論とスーフィズムのワリー論）があることを明らかにし、第9章ではさらにシーア派のイマーム論、サイイド・シャリーフ論をこれに加えることで、イスラームの枠内で人が聖性を帯びる議論をより包括的に議論の俎上に載せてみせている。

同時に第9章では、バラカ（恩寵）やマウリド（聖者祭）といった、思想的には議論されることがない概念の取扱いについて、それが否定や黙認に限らず、当然視されるがゆえに論じられないという可能性の指摘が注目される。それらは評者の専門である人類学の聖者崇敬研究では中心的な概念であり、えてしてそれらを、イスラームに教義的基礎をもたない土着的、あるいは非イスラーム的概念であると位置づけてきた人類学の先行研究があって、それらへの反省は、評者のなかでも

大きい。

第4部は、スーフィズム批判を見直す3つの章からなる。それらはいずれも異なる論争を取り上げながら、マムルーク朝初期、末期、そして19世紀の論争のいずれにおいても、タサウウフそのものの否定はみられなかったことを指摘する。これによって、スーフィズムがスンナ派のイスラームの不可分の一部となっていたことが明らかになり、同時にワッハーブ派を含むサラフィー主義の発想の異様さが際立つ。構成的にも第4部は見事である一方、イスラーム全体のなかでのスーフィズムの位置づけを論ずるという展開については、三極構造論、複合現象論に加えて、第2章でこれを見通す理論枠組みが提出されていれば、さらに本書全体の理解が進んだように感ぜられる。

以上に述べてきた以外にも、通説に対する多くの批判を含む本書が読者を啓発するところは多々あるが、本書全体について、なお書いておくべきと思われることを3つ、最後に簡単に述べておきたい。ひとつは、広範囲に目配りの効いた本書を読んだうえでは、著者の狭い意味での専門であるイブン・アラビーおよび存在一性論学派により特化した単著をぜひ近々に読みたいという希望であり、もうひとつは著者がこの道に入るその当初に志していた神秘主義一般のなかでのスーフィズムという研究の展開も、今後にはありえるかという期待であり、最後は著書によって示された学際的な視点に対して、方法論的にも、目指す一般化のありようについても異なる人類学や歴史学が、どのようにこれに対応

し、接合し、より豊かな研究を生み出しうるかを考える必要があるという、こちらは読者の側に突きつけられた課題の自覚である。

引用文献

東長 靖. 1996. 『イスラームのとらえ方』山川

出版社.

———. 2010a. 「スーフィズムの成立と発展」
佐藤次高編『イスラームの歴史 1—イスラーム
の創始と展開』宗教の世界史 11, 山川出版社.
———. 2010b. 「スーフィー教団の革新と再生」
小杉泰編『イスラームの歴史 2—イスラーム
の拡大と変容』宗教の世界史 12, 山川出版社.